通水150年へ

～ 明治用水は開削当初からSDGs ～

日本の農業用水は「参加型水管理」と呼ばれ、水を使う農家自身が水管理に携わり、長年にわたり施設・通水管理を行っています。明治用水土地改良区も同様の仕組みで運営しており、長期的な維持管理という点でSDGsの目標とも合致していると言えるでしょう。

明治用水水のかんきょう学習館では、矢作川から取水している明治用水が約100年以上前から行っている農業用水の管理や造林事業、また、矢作川沿岸水質保全対策協議会（通称：矢水協）による水質保全活動を中心に、明治用水におけるSDGsの取り組みを紹介しています。

わたしたちが食べる米や農作物は、水なしには育ちません。
明治用水は農業用水の供給をとおして安定的な食糧生産に貢献しており、飢餓をなくすことにもつながっています。

今から60年ほど前、矢作川には流域開発による大量の土砂や汚濁水が流れ込み、水産動植物は激減しました。矢作川にゆかりある団体で結成された「矢水協」の地道な活動により水質は回復、現在もきれいな水を守るための取組みが続いています。

明治用水は電気を使わない自然圧によるパイプラインで、環境負荷を減らしています。また用水により稼動している小水力発電施設では、農業用水のもつ再生可能エネルギーを有効活用しています。

矢作川の水は農業用水・工業用水・水道水に使用されているため、頭首工や水路が破損すると生活に大きな影響が出ます。明治用水は農業水利施設の耐震化対策工事を随時行い、住み続けられるまちづくりに貢献しています。

矢作川の水質が改善されたことにより、矢作川のアユ、三河湾のノリ・アサリをはじめとする水産動植物は回復し、10年ほど前にはアサリの漁獲量が日本一になりました。矢作川の水質改善をとおして、きれいで豊かな海を目指しています。

明治用水土地改良区は「水を使うものは自ら水を作れ」を合言葉に、1908（明治41）年から矢作川の水を守るための水源かん養林を管理し、豊かな森づくりに努めています。

明治用水の管理手法は参加型水管理と呼ばれるシステムで、水を使う農家も長年にわたり水管理に携わっています。これからも環境に配慮しながら、地域の財産としての明治用水を、地域とともに手を携えて守り続けていきます。

SDGs（エスディージーズ）とは?

SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）は、「誰一人取り残さない（leave no one behind）」持続可能でよりよい社会の実現を目指す世界共通の目標です。2015年の国連サミットにおいて全ての加盟国が合意した「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の中で掲げられました。2030年を達成年限とし、17のゴールと169のターゲットから構成されています。

（外務省パンフレット「持続可能な開発目標（SDGs）と日本の取り組み」より抜粋）

農業用水が果たす SDGs